

# 歴史探訪

## クラブ

History Inquiry Club

其の  
95



文化振興課 ☎23局 3635

FAX 22局 3811

### 松下石人 庶民の普通のくらしを記録した人

田原市の優れた郷土史の研究者に、大久保町出身の伊奈森太郎（1883～1961）が挙げられます。伊奈は、郷土の偉人を郷土教育に取り入れるなど、教育者としても成果を挙げたほか、渡辺崋山や田原藩、考古学、民俗研究など、各分野の研究者と連携を図りながら資料を発掘し、多くの著作を残しました。しかし、もう一人忘れてはならない人物がいます。それは当時の泉村で生まれた松下石人（1893～

1955）です。石人は東洋大学哲学科を卒業後、教育雑誌「教育時論」の記者となり、退職後に亀鶴院（亀山町）の住職となる一方で、研究を進めました。そして『三州奥郡産育図絵』（1936年刊）・『三州奥郡風俗図絵』（1937年刊）・『三州奥郡漁民風俗誌』（1941年刊）をまとめ上げました。

伊奈が、歴史のいわば表舞台の研究で活躍したのに対して、石人は歴史の年表にも残らない、時代とともに風化する庶民の普通のくらし（明治～昭和初期）を丹念に記録しました。地味な研究ですが、その内容の素晴らしさは、最初に出版した『三州奥郡風俗図絵』の原稿を見た日本民俗学の巨人、柳田国男が大いに評価し、伊奈森太郎に「もっと書いてもらいなさい」と言ったほどです。しかし、普通のくらしを聞き取るのは意外に難しかったようで、石人は「彼等の思ひのままに語って居る雑談の間に、話のつひでの流れに従って話題を引き出し、雑談のままの姿態に於いて聞くと云ふ方法をとるやうに務めた。」と話しています。海に囲まれた渥美半島の地域のく

らしを知るには『三州奥郡漁民風俗誌』がうってつけの素材です。漁師の日常の言葉づかいや衣食住、漁法、信仰の様子が、絶妙なスケッチとともに生き生きと記されています。



▲納屋建てと同じ構造の鯛小屋（戦前）

特に注意を引いたのは、海浜の網小屋と同じ建て方をした「納屋建」の建物です。草ぶきの屋根や、キャンプのテントのような床もない構造

### 納屋建



▲納屋建の住居  
『三州奥郡漁民風俗誌』より

は、現在の家に慣れた私たちから見ただらうぶん粗末なものかもしれないが、物にあふれた華美な生活をしなければ、実は合理的な住まいです。

これらの記録は、奥郡（旧渥美町）のものですが、くらしのさまざまな知恵が詰まっている田原市の大事な文化財といえます。『三州奥郡産育図絵』・『三州奥郡風俗図絵』・『三州奥郡漁民風俗誌』は、図書館でも閲覧できますので、ぜひご覧ください。（増山）

※前号で斎藤専吉が明治11年（1876）福江町に生まれ、明治32年（1961）清田尋常小学校の教員となり、昭和33年（1962）に死去と紹介しましたが、明治11年は9年、1961は1899、昭和33年は37年の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

### 今月の「表紙」

▼潮風の中にたたずむ、スイセンとサーファー。その凛とした立ち姿に、夢中でシャッターを切りました。寒い冬の海へ入るのは、サーフィンが好きなだからこそ。私も好きなこと、イラストを描いたりデザインしたりすることを、楽しみながら続けていきたいと思いました。（O）

【表紙の写真】赤羽根一色の磯とスイセン